



筑摩世界文學大系

65

カフカ

辻 理 訳
原 田 義 人



筑摩書房

筑摩世界文學大系 65

昭和四十七年八月十五日

初版第一刷発行

カフカ

訳者代表

辻 理

発行者

井上 達三

発行所

東京都千代田区神田小川町二ノ八
筑摩書房

郵便番号一〇一―一九一
電話東京(二九一)七六五二
振替口座東京四一二二三

印刷 三晃印刷 製本 鈴木製本所

落丁本・乱丁本はお取替いたしません

(分類) 0397 (製品) 20665 (出版社) 4604

目次

審判

辻理 5

城

原田義人 134

短篇

原田義人 341

変身

流刑地で

火夫

判決

皇帝の使者

家長の心配

最初の苦悩

断食芸人

421 419 418 417 409 391 373 341

年 譜	解 説	カ フ カ 論	カ フ カ 解 釈 に お け る 現 実 の 問 題
	原 田 義 人	ウ イ リ ー ・ ハ ー ス 人 訳	城 J・ 山 シ レ マ 良 彦 訳
463	453	440	429

カ

フ

カ

審判

第一章

逮捕・グルーバツハ夫人との対話、それからビュルストナー嬢

5 判 審
だれかがヨーゼフ・Kを中傷したにちがいない。なぜと云つて、何も悪いことをしなかつたにもかかわらず、ある朝彼は逮捕されたのである。彼に部屋を貸しているグルーバツハ夫人の料理女が、毎日朝の八時までには朝食をとどけにきていたのだが、それが今日に限つてやつて来なかつた。これは今までついでなかつたことである。Kはそれでもまだしばらく待ちながら、枕に頭をうずめたまま、向い側に住んでいる老婆が、この女にはおよそ見なれぬ好奇の眼で、自分を観察しているのを眺めていたが、やがて不審に思うと同時に空腹も感じてきたので、呼鈴をならした。たちどころにドアをノックする音が聞こえ、この家ではまだ一度も見かけたことのない男が入ってきた。すらりとしてはいたが、頑丈そうな体格で、体にびったりと

合う黒い服を着ていた。旅行服に似たもので、さまざまのひだやポケットや留め金やボタン、それにバンドもついており、そのせいで、何のためかは判然としなかつたが、いかにもものの役に立ちそうな実用的な服に思われた。

「どなたです？」とKはたずね、すぐベッドの中で上半身を起こした。

しかし男は、自分が現われたところで文句をつけることはなからうとでも言わんばかりに、この質問を聞き流し、逆にただこう聞いてきた。「呼鈴を鳴らしましたかね？」

「アンナに朝食をもつてこさせたいのです」とKは言い、はじめは黙つたままで、よく見てよく考え、この男がいったい何者であるのかを確かめようとした。しかし男のほうは、そんな視線に長いあいださらされてはいず、ドアのほうに向きを変えて、これを少しあげ、そのドアのすぐ後ろに立っているにちがいないだれかに向つて、

「アンナに朝食をもつてこさせたいのだとよ」と言つた。

隣の部屋でちよつとした笑い声が上がつたが、その声の響きぐあいからでは、幾人かの人が笑つたようでもあり、そこははっきりしなかつた。こんなことで、今までわからぬことがわかつたはずもないのだが、それでもその見知らぬ男は、今度はKに向つてまるで通告でもするかのような口調で言つた。

「それはだめだ」

「そりゃあ変だ」とKは言つて、ベッドから飛びおり、いそいでズボンをはいた。

「隣りにどんな連中がいるのか、それにグルーバツハ夫人が、こんな妨害の責任を、どうやってとつてくれるものか、それを知りたいものだ」こんなことを大声で言う必要はなかつたし、それにこれで幾分かは、この見知らぬ男の監督権を認めてしまつたことになると思はすに気がつたが、それも今の場合たいしたこととは思えなかつた。とにかく見知らぬ男のほうはそう思つたらしく、こう言つた。

「ここにいたほうがよくはありませんかね？」
「ここにいたくもなければ、あなたに話しかけられたくもないんだ、あなたが名前を名乗らぬうちはね」

「好意で言つたんですよ」と見知らぬ男は言い、今度は自分からドアをあけた。

Kが心ならずもゆつくりとした足どりで、隣の部屋に入つてみると、ここは一見したところ、ほとんど前の晩のとおりに見えた。グルーバツハ夫人の居間であり、ただ家具や覆いや陶磁器や写真でいっぱいになったこの部屋が、今日はいつともより片づいて少しばかり広くなつていくかもしれない。しかし、これはすぐにそれと見てとれる変化ではなかつた。というの男がそこにいたことだつたのだ。その男は開いた窓のところで、本を読みながら坐つており、今その目を上げたところである。

「部屋から出てはいけないうのに！ フラントが
そう言いませんでしたか？」

「聞きましたよ、いったいどうしようというんです？」とKは言い、この新しい知合いから目をうつし、フラントと呼ばれた、戸口に立ったままでいる男を見ると、またその目をもとに戻した。

開いた窓越しに例の老婆が見えたが、これは一部始終を見とどけるために、いかにも年寄らしい好奇心で、今また真向いにあたる窓へと歩みよっていたのである。

「どうしてもグルーバツハ夫人に——」とKは言い、実のところは遠く離れて立っている二人の男から、まるで身をもぎ離してもするかのような仕草をしてみせ、そのまま先に歩いて行くとした。

「いかん」と窓べの男が言い、本を小机に投げ立てちあがった。「行つてはならん、あんたは逮捕されたんだ」

「そうと見えますな」とKは言い、「ところでいったいなぜなんです？」

「われわれはそんなことを答えるために雇われちゃあいないんだ。部屋に戻って待っていたまえ。訴訟はとにかく始まつたんだから、時さえくれば万事間違ひなく知らせてもらえるはずだ。こんなに親身になつて話してあげるのは、わたしの任務外のことなんだぜ。だがフラント以外には聞いている人もいなかろうし、奴自身からしてが規定を犯して妙にあんたに親切なんだ。

こんないい監視人が決つたときのように、今後もあんたが幸運にめぐまれるなら、あんたも大いに自信を持つていられようというものさ」

Kは坐ろうとしたが、さて見廻してみると、窓ぎわのひじかけ椅子のほかに、坐るところがなかった。

「私の言つたことはいまにみななるほどと思ひ当たるさ」とフラントは言い、それと同時にもう一人の男といつしよにKに向つて歩いてきた。とくにこの男のほうはKよりずつと背丈が高く、よく彼の肩をたたくのだった。二人はKの寝巻を吟味して、あんたはこれからもつとずつと悪い寝巻を着なければならなくなるだろう、しかしこの寝巻もほかの下着類といつしよに、われわれ二人で保管しておいてやろう、そしてあんたの一件が首尾よく解決したら、また返してやろう、と言うのだった。

「品物は保管倉庫に入れるよりわれわれに渡したほうがましだよ」と彼らは言つた、「保管倉庫じゃあよく横取りされちまうことがあるし、おまけに一定の期間が過ぎると、その訴訟が終つていようがいまいが、それにはおかまいなしに、みんな売つぱらつてしまふんだ。それにこゝういった裁判沙汰はひどく長くかかるんだ、この頃はとくにそうだがね！ 最後にはもちろん保管倉庫から売上げをもらうことになるだろうが、この売上げというやつは、第一に、もともとごく僅かなものなんだ。というのも売却のときには、買手のつける値段できまるんじやなく

て、賄賂の高できまるんだ。そこにもつてきて、この売上げが長い年月手から手へと渡されていれば、またぞろ減つてゆくのが定石さね」

Kはこんな話にはほとんど耳をかしていなかった。自分の品物を自由に処理しうる権利は、まだ失われていなさそうだったが、彼にとつてそんな権利はたいしたことではなく、自分の置かれてゐる状態をはつきり知ることのほうがずつと重要だったのである。しかし、こんな連中を眼の前にしていては、考へてみることにさへできなかった。第二監視人——二人とも監視人以外のものではありえなかつたが——の腹が、親身のあまりとでも言わんばかりに、しよつちゆう彼につきあたつてくるし、といつて見あげてみれば、この太つちよの体にはおよそ似つかわしくない、ひからびて骨ばつた顔があり、そこに豪勢な、横にねじれた鼻がついていて、その顔が彼の頭越しにもう一人の監視人を意を通じあつてゐるのであつた。いったいこれはどういふ男たのぢやないか。何のことを話して合つてゐるのだらう？ どういふ役所の者なのだらう？ だつてこのおれは法治国に住んでゐるのだ、国じゆうが平和だし、法という法はすべて厳然として存在しているのだ、ひとの住居にふみこんで、不意を襲うようなまねをするとは、いったい何者なのだ？ 何事もできるかぎり氣楽に考え、最悪の事態は、その最悪の事態そのものが現われてからはじめてこれを信じ、たとえ雲行きが非常に怪しくなつてきたときでも、

格別なにも将来のための措置などは講じておかないというのが、常日頃の彼だった。しかし今度ばかりはこういった彼の傾向が正しいものとは思われなかった。なるほどこの事件を冗談、それも理由にはわからないが、もしかすると今日が彼の三十歳の誕生日だというので、銀行の同僚たちが仕組んだ粗野な冗談だとも取れなくなかった。もちろんこれはありそうなことだ。どうかして面と向って監視人たちを笑ってやれば、それですむことなのかもしれない、そうすれば連中もいっしょになって笑いだすだろう、二人は町角の使い走りの男たちかもしれない、そういえば何だか似ているようじゃないか——しかしそれにもかかわらず彼は今度の場合、文字通り監視人フランチを最初に見たその瞬間から、この連中に対して自分が持っているかもしれない有利な点は、どんな僅かなものでも、絶対に手放すまいと決心していたのである。後になって、冗談を解さない奴だ、と言われるかもしれないが、そんなことはごく小さな危険としか見えなかった。それより彼が思い出したのは——経験からものを学ぶなどというのは、今まで彼の習慣ではなかったのだが——二、三の、それ自体としては格別取るにも足らぬ事件であった。意識的に事を運ぶ友人たちとは異なり、どんな結果になるだろうかなどということは、一向に気にとめず、不用心な振舞いをしたために、事の結果そのものが天罰となってしまうことがあるのだ。こんなことは二度とくり返し

てはならない、少なくとも今度は絶対にだ。これが喜劇であるのなら、逆に自分も一役買って出てやろう。

彼はまだ自由の身だった。「失礼」と彼は言っ、二人の監視人のあいだをいそいで通りぬけ、自分の部屋に入った。

「ものわかりはよさそうじゃあないか」と言う声が入りしに聞こえた。

部屋に入るとすぐさま机の引出しをひきあげた。引出しの中はよく整理が行きとどいていたが、興奮しているため、他ならぬ目ざす目的の身分証明書がなかなか見つからない。とうとう自転車登録証が見つかった、それを持って監視人のところへ行こうとしたが、この書類ではあまりに貧弱すぎるように見えたので、思いなおしてまた探し、やっと出生証明書を見つけた。彼がまた隣りの部屋にもどったとき、ちょうど向い側のドアがひらき、グルーパツ夫人が入ってこようとした。姿を見せたのはかしほんの一瞬間だった。というのも、彼女はKの姿を認めるやいなや、目に見えて狼狽し、ごめんなさいとあやまってひっこむと、慎重そのものようにドアをしめたのだった。

「どうぞお入りください」とKはとっさの場合、やっとそれだけ言えただけだった。書類を持って、きょとんと部屋のまん中に立ち、まだこのドアをながめていたが、そのドアは二度とはあかず、監視人たちに呼びかけられて、はじめてびっくりとびあがる始末だった。監視人たちは

小さな窓ぎわの机につき、Kが今気づいてみれば、彼の朝食を平らげているのである。

「なぜあの人が入ってこなかったんです？」と彼はたずねた。

「禁じられてるんだ」と大きいほうが言った、「何しろあんたは逮捕されてるんだからね」

「いったいどうして逮捕されることがあるんです？ おまけにこんなやり口で？」

「またそろそろはまりましたな」とその監視人は言い、バタパンを蜂蜜の入れ物にひたした。

「そういう質問には答えませんよ」

「いいや、答えてもらいましょ」とKは言った、「これが私の身分証明書です、次はひとつあなたの証明書を見せてくれませんか、それに何よりもまず逮捕令状をね」

「とんでもないこった！」と監視人は言った、「往生ぎわの悪い奴だ！ それに見受けたところ、えりにもえってこのわれわれを、あんたは益もなく怒らせようとしているようだな！ われわれは今ありとあらゆるあんたの同胞のうちに、いちばんあんたの身近かにいる二人なんだぜ」

「そうなんだ、言うとおりなんだぜ」とフランチが言い、手にしたコーヒー茶碗を口には持つてゆかず、長いこと、意味深長らしくはあるがわけのわからぬまなざしで、Kを見つめた。思わずもKはフランチと眼つきで問答をかわすことになってしまったが、やがてしかし証明書を叩いて言った。

「これが私の身分証明書なんだ！」

「そんなものがわれわれに何の関係があるんだ」と大男の監視人はもう声をはり上げて言った、「子供より始末の悪い奴だ、いったいどうしてほしいんだ？ われわれはただの監視人なんだ。その監視人と身分証明書だの逮捕令状だの、そんなことを議論して、それであなたの呪われた大きな訴訟事件に、すばやく片をつけようとしてもなさるのかね？ われわれは身分の低い雇われ者なんで、身分証明書など見たところでわけがわからぬし、あなたの事件とかかわりあいといったら、毎日十時間あてあなたのところで見張りをし、その分の給料を貰うというだけのことなんだ。これがわれわれの全部というもんさ。ただしかしおれたちにも、おれたちの勤めている高級の役所では、こんな逮捕を行う前に、逮捕の理由や被逮捕者の人物などについて、きわめて正確に調査してあることぐらいはわかっているんだ。その調査には誤りなんかこれっぽっちもありゃしない。おれの知っている限りじゃあ、そしておれの知っているのはいちばん下っぱの階級の者だが、われわれのお役所は、民衆の中に罪を探しまわるなんていうまねはしていないんで、法律にもあるとおり、ただ罪によってひきつけられるだけなんだ、そしてそのためにわれわれ監視人を送ってよこさねばならなくなる。これが法律というもんさ。どこにいったい間違いがあるというんだね？」

「そんな法律は知らないね」とKは言った。

「知らないだけあなたの損さ」と監視人が言った。

「そりゃあまたあなたがたの頭にだけある法律でしょうよ」とKは言い、とにかく監視人たちの考えていることの中にそつと入りこみ、その考えを自分に有利なようにしむけるか、逆にその考えに同化してみようとした。しかし監視人はただ拒むようにこう言った。

「そのうち目にも物を見せてもらうさ」

フランクがくちばしを入れて、

「見ろよヴィレム、奴さんは法律を知らぬと白状しながら、同時に無罪だなんて言いはっているんだ」

「お前の言うとおりさ、でもこの男に分らせてやるなんてのは、金輪際無理だよ」ともう一人のほうと言った。

Kはもう返事をしなかった。こんな下っぱの連中——彼ら自身がそう認めているのだ——とおしゃべりして、これ以上頭を混乱させる必要はないではないか、と彼は思った。だって明らかにこの二人は、自分自身でもわけのわからぬことをしゃべっているのだ。妙に確信を持っていられるのは、ただ連中が阿呆なためなのだ。自分と同等の人間と二言三言話しさえすれば、こんな連中と百年話をするよりも、万事比較にならぬほどはつきりすることだろう。彼は部屋の中のある場所を二度三度行ったりきたりした。向いの窓には例の老婆の姿が見えたが、この老婆は自分よりもっとずっと年をとった老人

を、窓のところにひっぱってきて、これを抱きかかえてやっているのだった。こんなふうに見物になるのはやめねばならない。

「上役のところに連れていってくれたまえ」と彼は言った。

「上役のお声がかかったならばだ、それまではだめだ」と、ヴィレムと呼ばれた監視人が言った。「ところで忠告しておくが」と彼はつけ加えて、「部屋にもどって、静かにし、指令を受けるまで待ったがいいね。とりとめもなくいろいろなことを考えていないで、ちゃんと気をしっかりさせておくんだ、あなたに対してはとてつもない要求が出されることになるうからね。あなたのわれわれに対する扱いときたら、こりゃあとても親切のお返しをしてあげられるようなものじゃあなかった。あなたは忘れているんだが、おれたちは相も変らぬつもらぬ者ではあるうが、でも少なくとも今あなたに対しては、自由な人間なんだぞ。これはちつとやそつとの優位じゃあないんだ。しかしそれでも、もしあなたに金があるのなら、まあ向うの喫茶店から軽い朝食ぐらいはもつてきてやつてもいいがね」

こんな申し出には返答をしないで、Kはしばらくのあいだじっと立ったままだった。自分が次の部屋の下、いや、さらに控室の下をあけても、この二人にはそれを阻止することは全然できないだろう。ひょっとすると、こうして極端なことをしてかしてみるといいうのが、いちばん簡単な事の解決法かもしれない。でもやっ

ぱりこの二人は掴みかかってくるかもしれない、もしいったんこちらがぶち倒されてしまえば、今ならまだある点でこの連中に対して保持している優位も、みんな失われてしまうのだ。そんなわけで彼は、事自然な成行きから生じてくるにちがいない安全な解決法のほうをえらんでとり、自分の部屋にもどったが、彼のほうからも監視人たちのほうからも、もうそれ以上一言も言わなかった。

ベッドに身を投げると、彼は洗面台から、昨夜朝食のために用意しておいたきれいなりんごをとった。このたった一つのりんごが今は彼の朝食というわけだが、それでも、あんぐりと一口噛んで確かめてみたところ、これは監視人たちが恩きせがましく取りよせてくれる、うす汚い深夜喫茶の朝飯などより、ずっとましだった。気分がよくなり、自信もわいてきた。今日の午前は銀行を休むことになるが、比較的高い地位にいるのだから、弁解するのは簡単だった。その弁解にほんとうのことを言うべきだろうか？ そうすることにしよう。自分の言うことを信じてもらえないときには——こんな場合にはそれももつともなことだが——、グルーパッハ夫人を証人に立てることもできるし、場合によっては、向いの二人の老人でもいい。きっとこの二人は、またこの部屋と真向いの窓に向って、行進中のことだろう。どうも不思議に、いや少なくとも監視人たちの思考過程から言って不思議に思えたのは、彼らが彼を部屋に追いもどし、

ここにたった一人でおいておくことだった。なぜとって、ここは自殺しようとするば、いくらでもその方法があるではないか。もつともそう思うと同時に、今度は自分の思考過程から、自殺するとしたいという理由がありうるのだろうか、とも自問してみた。まさか隣りの部屋にあの二人が居坐って、彼の朝飯を平らげてしまったから、というわけにはよくまい。自殺するのはどうもあまりにばかげていて、たとえ自分がそうしようと思ったところで、そのばかばかしさのために、自殺できなくなってしまうだろう。監視人たちの知能程度があればど目立って低いものでなかったならば、彼らもやはり同じような確信をいだいていたために、おれを一人にしておいても何の危険もないと考えたのだ、とそう取ることもできたのだが。連中に今その気さえあれば、これが見えるところなのだがと思ひながら、彼は上等のブランデーを入れてある小さな押入れのところに行き、最初はず一杯朝飯のかわりに乾し、二杯目は勇気をふるいたせるためときめたが、しかしその二杯目は、そんなことが必要になる、ありそうにもない場合のことを考え、ただの用心のためだった。

とその時、隣りの部屋からいきなり呼びかけられて、彼はひどく驚き、グラスに歯をぶつけてしまった。

「監督のお呼び！」というのだ。彼を驚かせたのは、たんにその叫び声だった。

短い、ぶっきれた、軍隊式の叫び声で、とても監視人フランクのものとは思えなかった。命令そのものは大いに歓迎すべきものだったのである。

「やつのことで！」と彼は叫び返し、押入れの戸をしめて、すぐに隣りの部屋へと急いだ。そこには二人の監視人が立っており、まるで当然のことのように、彼をまた部屋へ追い返した。「なんということだ？」と二人は叫んで、「寝巻のまま監督の前に出ようというのか？ 監督はお前をぶちのめさせて、しかもおれたちまで巻添えだ！」

「行かせろつたら、畜生め！」とKは叫んだが、もう洋服筆箒のところで押しもどされていた。「寝込みを襲って（だん）おいて礼装してろなんて言えた義理か」

「なんと言ったってだめだ」と監視人たちが言ったが、この二人はKが叫び声をたてるたびに、静かに、というよりはほとんど悲しげになり、そのために彼の気持を混乱させたり、あるいは逆に、正気になち（どうも）もどらせたりもするのだった。「こつけないしごくな（どうも）仰山（ようざん）さじゃないか！」と彼はなおも不平をならしたが、それでも椅子から上衣をとって、監視人の判断を求めでもするかのように、それをしばらくのあいだ両手でささえていた。二人は頭をふった。

「黒の上衣でなくちゃあだめです」と彼らは言った。それに答えるようにKはその上衣を床に投げ出すと、こう言った——どういう意味で言

ったのは、自分でもわからなかったが——。

「だってまだ本審理じゃあないじゃないか」

監視人たちは微笑を浮かべたが、意見を変えはしなかった。

「黒の上衣でなくちゃあだめです」

「そのほうが手とりばやいというのなら、それでもいいさ」とKは言い、自分で洋服筆箱をあけると、長いことかかってた皆さんの洋服をかきまわし、いちばんいい黒服を選びだした。

短上衣の黒服で、腰恰好がいいといつて知人たちのあいだに評判をとったほどのものである。彼は内心ひそかに、事を早めることができたのは、監視人たちが風呂呂に入れと強制するのを忘れてしまったせいだ、と思った。それでもまだそのことを思ひだすかもしれないと、彼ら二人を観察していたが、もちろんそんなことは二人とも夢にも思ひ浮かべず、そのかわりにヴィレムが忘れなかつたのは、Kが服を着ているという報告をもたせて、フランクを監督のところにやることだった。

すっかり服を着てしまうと、ヴィレムのすぐ前を歩いて人気がない隣りの部屋を通りぬけ、次の部屋に行かねばならなかった。もうドアの両扉とも開かれていた。この部屋は、Kもよく知っているとおり、しばらく前からタイピストのビュルストナー嬢が住んでいるのだが、朝非常に早く仕事に出かけるのが常で、夜はまた遅く帰るため、挨拶の言葉以外にあまり話をした

ことのない女だった。今はベッドの傍の小机が審理用の机として、部屋の中央にもち出され、監督はそのうしろに坐っていた。両脚を組み、片方の腕は椅子のひじかけにのせていた。

部屋の片隅に三人の若い男が立ち、ビュルストナー嬢の写真に見入っていたが、その写真は壁にかけたマットの一つにとめてあった。開いた窓の把手には一枚の白いブラウスがかがついていた。真向いの窓にはまたまた例の二人の老人が見えたが、今度は仲間がふえて、彼らのうしろにずっと背の高い男が、シャツの胸をはだけたまま立っており、赤っぽいとんがりひげを、指でおしたり、ひねったりしていた。

「ヨーゼフ・Kだな？」と監督はたずねたが、これはただKの散漫な視線を自分に引きつけるためだったようである。Kはうなずいた。

「今朝のいろいろな出来事で非常に驚いたでしような？」と監督はたずね、そのさい両の手で、小机ののっているわずかばかりの品物をおしつけたが、それはマッチとろうそく、本一冊に針刺しで、まるで彼が審理に必要としている品物でもあるかのようなだった。

「ええ」とKは言ったが、やつともののわかった人間に相對して、その男と自分の事件について話し合えるのだ、という快感が彼をとらえた。

「ええ、驚きはしましたが、非常にいうわけではありません」

「非常にいうわけではない？」と監督はたずね、ろうそくを小机のまん中に立て、他の品物

をそのまわりによせ集めるのだった。

「私の言葉を誤解なさったかもしれませんが」とKはせきこんで言った、「私が申しましたのは——とここで中断し、椅子はないものかとあたりを見まわした。

「坐ってもよろしいでしょうね？」と彼はたずねた。

「そういう慣例はありませんな」と監督が答えた。

「私の申しましたのは」と今度はKは間をおかずに言った、「なるほど私は非常に驚きはしたが、しかし人間この世で三十にもなり、私の運命のように、独力でこれまで切り抜けてこなければならなかったとなれば、不意打ちなどに対しては、もう十分にきたえあげられ、そうそう辛いことも思わぬものだ、ということなんです」と今日の不意打ちなんかはそうですね」

「なぜまたとくに今日のがそうなんです？」

「この件全体を冗談事だと思っている、というわけではないんです。だって冗談にしちゃあ、道具立てでがでかすぎますからね。この下宿の住人全部がそれに参加してるようだし、それにあなたがた全部もそうだとすれば、これはもう冗談事ではありませんよ。ですから、冗談だとは言わぬつもりです」

「そのとおり」と監督は言つて、マッチ箱の中にマッチが何本あるかを検討していた。

「しかしまた一方」とKは言葉をつづけ、みんなのほうに顔を向けて、写真のところにいる三

人もこちらを向けばいいのにとさえ思いながら、「しかしまた一方、この件はそう重要なものではないのです。なぜそう推論するかといえ、私は告発されているというのに、私には告発されるほどのほんの僅かな罪さへ見当たらないんです。しかしまあこれも枝葉末節のことで、いちばん大切な問題はこれです。私はこれによって告発されているのか？ いかなる役所が審理を行うのか？ あなたは役人ですか？ だれ一人として制服を着ていない、その服を——とここでフランクスのほうにむき——「制服と呼ぶのは少し無理で、旅行服といったほうがあたっていますからね。こうした質問に私ははつきりしたご返答を要求するものです。それさえはつきりさせることができれば、お互いに心からの握手をして、別れることができる」と確信しますよ」

監督はマツチ箱を机の上に投げつけた。

「あなたは大変な間違いを犯しておられる」と彼は言った、「ここにいたかたがたと私は、あなたの事件にとってみれば、まったく取るにも足らぬほどのものなのです。いや、そればかりか、われわれはあなたの事件についてはほとんど何も知らないのです。なるほどわれわれはきちんとした規則どおりの制服を着ることもできましようが、われわれが制服にしたからといって、あなたの件が工合が悪くなるということもないのです。また私はあなたに、あなたは告発されているのだ、などとも全然言えないのです

いや、むしろ、あなたが告発されているのかどうか、それさえ私は知らないのだ。あなたは逮捕されている、それは確かです、しかしそれ以上のことには私は知りません。監視人たちが何か他のことをおしやべりしたかも知れませんが、それは文字どおりただのおしやべりだったわけです。しかし私は今こうしてあなたの質問に答えてはいませんが、それでも私はあなたに対して忠告はできるわけで、どうかわれわれのことや、あなたの身に起こるだろうことなどに、そう頭を悩ませないで、むしろあなた自身のことを考えてほしいものです。そして、自分が無罪だという感情でこんな騒ぎをひき起こさぬことですな。そう悪くもない印象を与えているあなたなのに、これはご損というものです。またおよそ弁舌の点でも、もっと控え目になる方がいいので、あなたがさきほど話して聞かせたことは、ほとんど全部、あなたがほんの二言三言に止めておいたところで、態度からも推定できたことなんです。のみならず、それはあなたにとってそうひどく有利なことでもなかったのですよ」

Kは監督の顔を見つめた。自分より若そうな男からここでお説教をくうというわけか？ こちらがあけすけに話してやったおかげで、叱責をうけるといふわけか？ そして、逮捕の理由や令状の出所については、何も聞けないというわけなのか？ 彼は一種の興奮状態におちいり行ったりきたり歩いて——これはだれも妨害しなかった——、カフスをおし入れてみたり、胸の

ところにさわったり、髪をなおよすうになたりし、三人の男たちのところを通り過ぎながら、「無意味なことだ」と言ったが、三人はこれに聞いて彼のほうにむきなおり、意を迎えるようにはあるが、しかし真面目くさった顔つきで、彼の顔をじつと見つめるのだった。ついにまた監督の机を前にして立ちどまると、

「検事の手スタラーとは呢懇なんだが、電話してもよろしいでしょうね？」と彼は言った。

「いいですとも」と監督は言い、「ただそれになんか意味があるのか、私にはわかりません。何か個人的な用件で彼と話をしなくちゃあならない、ということでしょうな」

「どんな意味があるのかだって？」とKは叫んだが、腹を立てたというより狼狽していた。

「いったいあなたは何者なんです？ 意味があるかなどと言いながら、この世に存在する限りの、もっとも無意味なことを演じているというわけですか？ これはどうもあわれなほどじゃありませんかね？ このお二人がまず私を襲撃したわけだが、今はこのまわりで坐ったり立ったりして、この私にあなたの前で高等馬術をやらせているんです。私を逮捕したと申し立てているくせに、検事に電話することに何の意味があるのかですって？ よろしい、それじゃあ電話はかけますまい」

「いやどうぞ」と監督は言って、電話のある控室のほうに手をのばしながら、「どうぞ電話をおかけください」

「いいや、もうその気はありません」とKは言い、窓のところへ行った。

向いではまだ例の連中が窓ぎわに陣取っていたが、Kが窓のところへ歩みよったので、今はじめて、落ちついて見物していたのを乱されたといった様子である。老人たちは身を起こそうとしたが、うしろの男がこれを制した。

「あそこにはまたあんな見物人がいるんだ」とKは監督に向って大声で叫び、人差指でおもてをさした。それから、

「そこからどけ！」と彼は向うに叫んだ。

三人の者もすぐ二、三步ひきさがり、その上老人たちが男のうしろに廻ったのを、この男は幅のひろい身体で隠してやり、口の動きで察するところ、何か遠いためにわけのわからぬことを言っているらしかった。しかし連中はすっかり姿を消してしまつたのではなく、気づかれずにまた窓のところに近づくことのできる瞬間を、待っている様子だった。

「あつかましい無遠慮な奴らだ！」とKは言いながら、また部屋のはうに身を向けた。Kが横目で見ると、監督は彼の言葉に相槌をうっているようにも思われた。しかし、また、全然聞いていなかったようでもあり、それというのも、監督は一方の手をしっかりと机におしつけ、それぞれ指の長さを比べてみている様子なのだ。二人の監視人は飾り覆いのかけてあるトランクの上に坐り、膝をこすっていた。三人の若い男は両手を腰にあて、あてもなくあたりを見廻し

ていた。どこかの人氣のない事務所のように静かだった。

「ところでみなさん！」とKは叫んだが、一瞬、この部屋にいる全部の人間を彼の肩になつてゐるかのうに思われた。「みなさんの様子から察するに、私の件は終つたとしてよろしいようです。私の見解では、あなたがたの処置が正当であるかないかは、もう考えないことにして、お互いに握手を交わしてこの件に円満な決着をつけるのが、いちばんいいようです。あなたも私と同じ見解でしたら、どうか——」

そう言つて監督の机に歩みより、握手のための手をさし出した。監督は目を上げると、唇をかんで、さし出されたKの手を見た。Kはまだ監督が手をさし出してくるものと思つていた。しかし監督は立ち上がり、ビュルストナー嬢のベッドの上にあつた固くて丸い帽子を取りあげ、新しい帽子を試してみるときのように、これを用心ぶかく両手でかぶるのだった。

「あなたには万事がいくとも簡単に見えるのですな！」と彼はKに向つて言つた、「事に円満な決着をつけなくちゃあなたとね。いやいや、そうはほんとうにいかないんです。かといつて私は、あなたがたに絶望しろと言うつもりでも全然ありません。絶望なんてとんでもない。あなたは逮捕された、というだけのことなのです。それをあなたに言うのが私の任務でしたから、それを果たし、あなたがそれをどんなふうにも受け入れたかということも、今この眼で見たわけ

です。これだけで今日のところは十分ですから、もうお別れできますよ。もつとも、さしあつては、というだけです。さてそうなるともう銀行に行きたいとお思いでしょうな？」

「銀行へですって？」とKはたずね、「私は逮捕されたのだと思つてましたよ」

Kは一種の反抗心でたずねた。というのも、彼が握手のためにさし出した手は受けいれられなかつたが、それでも彼は、自分がここにいるすべての人間からますます独立したものになつてゆくを感じたからである。とくに監督が立ちあがつてからはそうだった。彼は連中といつしよになつて遊ぶ氣だった。連中がもしこを立ち去るようなときには、門のところまで追いかけて行つて、私の逮捕をどうしてくれるのですか、と言つてやるつもりだった。それで彼はこうくり返した。

「私は逮捕されているんですから、銀行になんか行けるはずもないでしょう？」

「ああ、そうか」と監督はもうドアのところと言つた、「あなたは私の言つたことを誤解したんです。あなたは逮捕されている、確かにそうだが、しかしだからといって、それはあなたが職務を遂行するのを妨害するわけではないのです。生活は今までどおり普通にしていにかまわないのです」

「それじゃあ逮捕されているのもそう悪いことじゃあないね」とKは言い、監督に近づいて行つた。

「悪いことだと言ったためしは一度もありませんよ」と監督は言った。

「しかしそれじゃ逮捕の通知だって、たいして必要じゃあなかったと思ひますがね」とKは言い、もつと近くへ寄つて行つた。他の連中も近よつてきた。みんながドアのそばのせまいところにより集つた。

「それが私の義務だったのです」と監督が言つた。

「ばかげた義務だ」とKは負けずに言ひつた。

「そうかも知れませんが」と監督は答へ、「しかしこんなことを言いつのつて時間つぶしはしますまい。私はあなたが銀行に行きたがつていると思つていたのです。どうもあなたは人の言葉のはしはしにまで気を回すようですから、こうつけ加えておきましょう、私のほうには無理にあなたを銀行に追ひやる気は全然ないんで、ただあなたが行きたがつていゝと思つていただけのことなのです。そして、出かけやすくもし、また銀行に着いたときにはできるだけ人目に立たぬようにと、そういうあなたのお役に立てるために、私のほうではこの三人のかたがた——あなたの同僚のかたですが——をお連れしてあるのです」

「ええ？」とKは叫び、驚いてその三人の顔を見つめた。この、およそ特徴のない、貧血症の若者たちは、彼としてみれば今もつて写真のそばにいた一グループとしての記憶しかないのだが、それがまたまごうかたなく彼の銀行の行員

だったのだ。同僚ではなかった、これは言い過ぎというもので、監督が何でも知つていそうではないが、じつはそこに穴があるのを証明したいが、しかしとにかく銀行の下僚であるにはちがひなかった。どうしてこれに気がつかなかったのだろう？ この三人に気がつかなかったとは、それほど監督と監視人とに気をとられていたのだろうか！ なるほど見れば、体がこわばり、両手を振り動かしているラーベンシュタインナーだし、目のおちくぼんだブロードのクリヒだし、慢性の筋肉緊張のため、いやなうす笑いをうかべているカミナーではないか。

「おはよう！」とKはしばらくしてから言い、しやちほこばつて頭をさげる三人に手をさし出した。

「あなたがたとはさっぱり気づかなかつた。さあそれじゃあ仕事に出かけようか？」

三人は今までずつとこれを待ちもうけてでもいたかのように、笑ひながら熱心にうなずいた。ただKが、自分の部屋においたままで帽子がないのに気がついたとき、これを取りに三人ともつづいて走つて行つたが、その様子を見ると、何か彼らの当惑ぶりがわかるのだった。Kはじつと立ったまま、開いた二つのドアを通して、三人の後姿を見おくつていたが、どんじりはもちろん、どうでもいい気のラーベンシュタインナーで、これはただ粋な跣足をやって見せてるだけだった。帽子を渡してよこしたのはカミナーだったが、Kは自分自身に向つて——もつとも

銀行でもよくそうする必要があつたのだが——、カミナーのうす笑ひはそのつもりでやっていることではないのだ、いやそれどころかこの男はおよそ意図して微笑するかなどはできないのだ、とはつきり言つて聞かせなければならなかった。控室ではグループバッハ夫人がみんなのために玄関のドアをあけたが、そうたいして悪いことをしたとの様子も見せず、Kが見おろすのは、いつものように、太った胴体に不必要に深く食いこんでいる彼女の前かけのひもだった。街にでるとKは時計を手にして、自動車に乗りうと決心した。もう半時間も遅刻しているので、これ以上不必要に遅れたくはなかつたのである。カミナーが自動車を拾ひに街角まで走つてゆき、他の二人は明らかにKの気をまぎらそうと努めているようで、クリヒが突然向い側の門を指さして見せるのだった。その門にはちょうど今、例のブロードのとながりひげのある大男が姿をあらわし、こうして今全身をあらわにしてしまつたことに、最初の一瞬はちよつと狼狽したが、家壁のところに身をひくと、そこに寄りかかるのだった。老人たちはおそらくまだ階段を降りてくるところなのであろう。Kはクリヒが、人もあろうに自分が前に見もし、出てくるだろうと予期さへしていたその当の男を、わざわざ気づかせて見せたことに腹を立てた。

「見るんじゃない！」と彼は叫び、一本立ちになつた男たちに向かい、こんな話し方をすれば、それがどんなに眼に立つことかには気がつかない

かった。しかし説明する必要もなかった。ちょうど自動車がやってきたからで、三人ともこれに乗って走り出した。とKは、監督と二人の監視人が立ち去ったのに自分が全然気づかなかったことを思い出した。監督のおかげで三人の行員に気づかず、今度はまた行員たちに気をとられて、監督から眼を放してしまったのだ。どうもこれではそう感心した気の配りようとは言えなかったで、こんな点は、もっと正確に観察しようとしてKは決心した。しかし彼はなおも思わず知らずのうちにうしろをふり向き、もしやして監督と監視人の姿がまだ見えないものかと、自動車の背から身をのり出してみた。しかしすぐにまた向きなおし、車のすみに気持よく身をよせて、だれかを探すことなどは結局試みてもみなかったのである。そんな様子は見えなかったが、今こそ慰めの言葉の一つもかけてもらいたいところであった。ところがもう連中は疲れた様子で、ラーベンシュタイナーは車の右クリヒは車の左をながめ、カミナーだけが例のとおり顔をゆがめて笑いながら、お相手の用意をしていたが、こんな笑い顔を冗談の種にするのは、残念ながら人情の禁じるところであった。

この春、Kが毎晩どんなふうにすごしていたかといえば、仕事のあと、まだそれができればのことだったが——というのも、彼はたいてい九時まで事務室に坐っていたのである——、一人でか、あるいは他の行員たちといっしょに、

ちょっとした散歩をし、それからビヤホールに行つて、その常連——中年の紳士が多かったが——のテーブルにつき、その連中と普通は十一時まで仲間になつて坐っていたのである。しかし、こういった時間の区切り方には、また例外もあったわけで、たとえば、彼の仕事ぶりと信頼性を非常に高く評価していた銀行の支店長から、ドライブにさそわれたり、別荘での夕食に招待されたりした場合がそうだった。その他にKは一週に一度、エルザという娘のところにかけて行つたが、これはある飲み屋で、夜は夜とおし朝おそくまで、給仕女として働き、日中はいつもベッドに寝たまま訪問を受ける、といった女であつた。

しかしこの晩だけは——昼間は仕事に追われ、また誕生日だというので、たくさんの人々から、敬意と友情をこめたお祝いを言われているうちに、たちまち過ぎ去ってしまった——Kはすぐ家に帰ろうと思つた。昼間の仕事の合間には、いつもそのことを考えていたのだった。何が起きたともはつきりつかめなかったが、今朝の出来事のせいで、グルーバツハ夫人の下宿全体に、何か大混乱がひき起こされているような気がしてならず、また、その秩序回復には自分がなくてはならぬもののように思えたのである。しかしこの秩序さえうち立てられれば、今朝の出来事の痕跡はみんな消え去つてしまひ、すべてがまたもとどおりの軌におさまることにならう。とくに例の三人の行員には、何ら心配すること

もなかった。彼らはまた大勢の行員の中にうずもれてしまひ、その動静には何の変化も認められなかった。目的はただ彼らを観察することにあつたのだが、Kはよく彼らを単独で、あるいは束にして、自分の事務室に呼びつけてみた。結果は毎回満足して、彼らを放免してやることでできたのである。

夜の九時半に、彼の住んでいる家の前についてみると、門のところで一人の若僧に出あつたが、この男はそこに足をひろげてふんばり、パイプをふかしているのだった。

「どなたです？」とKはただちにたずね、顔をその若僧に近づけたが、玄関のうす暗がりの中では、あまりよく見えなかった。

「この家の管理人の息子ですよ、旦那」と若僧は答え、パイプを口から取つて、道をあけた。

「管理人の息子だつて？」とKは聞きかえし、いらだちながらステッキで床をたたいた。

「旦那は何かご用なのですか？ 父を呼んでみましょうか？」

「いや、いや」とKは言つたが、彼の声の調子には、何か人をゆるしてやっているようなところがあり、まるでその若僧が何か悪いことをしでかしたが、こちらはそれを勘弁してやっているのだ、とても言いたげだった。それから彼は、「いいんだよ」と言い、先に歩いて行つたが、それでも階段をのぼる前には、もう一度ふり向いてみたのである。

まっすぐ自分の部屋に行くこともできたが、